

町の文化財あれこれ 其の七十九

湘南馬車鉄道・湘南軽便鉄道の歴史(八)

現在、神奈川県下で「鉄道の無い町—中井町」です。明治から昭和初期秦野から井ノ口を通り二宮駅まで「湘南馬車鉄道」「湘南軽便鉄道」が走っていた時代を知る方が少なくなりました。その前後の歴史を少し神奈川県西部地域に拡大してご紹介しております。

「軽便鉄道」というと県西部で、小田原から熱海までのイメージが強く、小田原市民でも曾我山の向こうの中井町にそんな鉄道が走っていた事を知らない方が多かったのです。明治三十九年(1906)小田原から熱海まで温泉客輸送の客車一両をひく軽便鉄道の蒸気機関車が熱海駅前に現存する静態展示されている機関車です。元々の人車鉄道に替わる温泉客の輸送に使われておりました。

その頃に通した「湘南馬車鉄道」は、秦野の葉煙草専売公社から茨城や、東京や、鹿児島工場への良質な葉煙草原料の輸送や、横浜港や東京への落花生や、丹沢の木材や綿織物の輸送と、東海道線からの「大山詣で」のお客の輸送に、馬車鉄道の輸送量では賄い切れない状態になってまいりました。当時、この煙草専売公社を秦野に持ち込んだ伊藤博文元総理は、晩年大磯の別荘に永住し、馬車鉄道を利用して専売公社へ視察に度々訪れていました。既に、その頃「これからは馬車の時代では無い」と蒸気機関車での輸送を予測しておりましたが、

明治四十二年(1909)中国奉天で暗殺され亡くなりました。伊藤総理の影響を受けた馬車鉄道の株主達は、明治四十五年には、山梨の鉄道王・雨宮敬次郎率いる、新たに手掛けた鉄道会社・製作工場を持つ「大日本軌道株式会社鉄工部」(後の東京雨宮製作所)に、



雨宮敬次郎

三台の蒸気機関車を発注し、その後、二台、合計五台の機関車を発注しており、大正二年(1913)の「湘南軽便鉄道」の開通に漕ぎつけるのに大きく影響したものと思われます。

その後の大正初期の好景気の時代には、秦野に出来た陸軍の飛行場への飛行機や、部品・武器の輸送もしており、秦野で起こった、水車利用の軍需産業や、後の自動車部品の製造にも貢献し輸送面でも大いに役立ったものと思われます。

この山梨(現甲州市)出身の鉄道王・雨宮敬次郎は、弘化三年(1846)九月に筆頭名主雨宮惣右衛門の次男として生まれ、



湘南軽便鉄道

明治四年(1871)に横浜で蚕種紙相場を中心にドル・銀相場での投機事業を繰り返し、明治九年(1876)にアメリカ、ヨーロッパを約七か月視察し、翌年に東京で製粉工場(後の日本製粉)を立ち上げ、その後軽井沢で開墾事業を始めました。当時富国強兵、殖産興業を図るためには、交通機関の発達と製鉄事業の興起を図られなければと力説し、伊藤博文や、福沢諭吉との交流を深くし、鉄道と製鉄の経営に重点を置くようになりました。明治二十一年(1888)に甲武鉄道(後の中央本線)の取締役に任じられ、以後、川越鉄道、北海道炭鉱鉄道、江の島電鉄、熱海鉄道などの鉄道事業や、製鉄事業などの経営に携わり活動しました。

この地域に鉄道建設事業がなされたのは、こうした支援者や協力者の尽力があったからではないでしょうか。

(文化財保護委員 尾上 仁郎)